健幸plus+
市立総合病院からのお知らせ
☎0538-38-5000
FAX0538-38-5050

下肢静脈瘤について

血管外科・科長
斉藤 貴明

血管には、動脈と静脈があり、動脈は組織に血液を送る管、静脈は心臓に血液を返す管です。

下肢静脈瘤とは、下肢の表面を走行する静脈の弁不全・異常による逆流現象を病態として、立位にて重力に負けた血液が逆流し、静脈内に貯留する病気のことを言います。

症状として、下肢のだるさ・浮腫・かゆみ・こむら返りを伴うようになり、ひどくなると「皮膚炎（色素沈着）や皮膚潰瘍」となり、日常生活に制限を伴うようになります。

下肢静脈瘤には4つのタイプがあり、蜘蛛の巣状・網目状・側枝型・伏在型と分類され、一般に立位にて下肢の静脈が「ぼこぼこ」と拡張するのが、「側枝型」と「伏在型」となり、治療対象となります。

下肢静脈瘤の危険因子としては、「肥満・遺伝・女性・高齢・妊娠（出産）・長時間の立位・外傷」などがありますが、日本人女性では約4人に1人が罹患していると言われています。

治療は症状に応じて、軽い場合は弾性ストッキングの着用を、重い場合は手術を行います。手術に関しては、以前は逆流している静脈を抜去しておりましたが、現在は血管内治療（カテーテル治療）で閉塞させる手術が主体となっています。これには、熱で閉塞させる焼灼術と接着剤で閉塞させる塞栓術（グルー）があります。いずれも穿刺のみで治療でき、当院では一泊二日の入院で行っております。

立位で下肢の血管が「ぼこぼこ」と拡張し、「皮膚のかゆみや皮膚炎」でお困りの方は、一度血管外科を受診してみてはいかがでしょうか。

採血検査の見方について

臨床検査技術科・技師長
清水 憲雄

病院や健康診断でもらう血液検査の結果でどんなことがわかるかご存じですか？

血液検査の結果には、項目と数値が書いてありますが、多くの場合、詳しい内容まで書かれていません。検査のデータは、血液に含まれている何らかの物質の量を測定しており、その物質名が項目に書かれています。まずは、各項目の意味や特性を理解することが重要です。

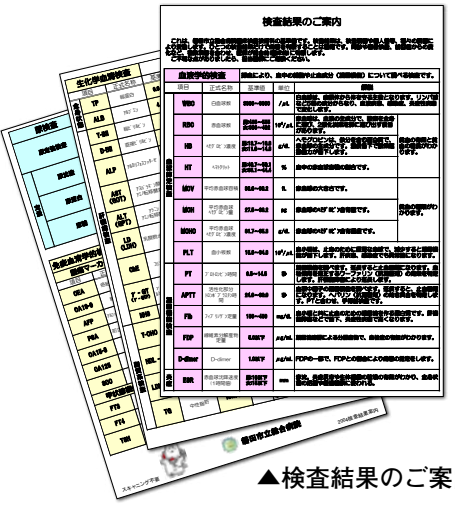
検査値が標準的な値よりも高値や低値の場合、それはどこかの臓器異常を示していたり、何らかの疾患と関係していたりすることになります。

その判断の『ものさし』となる数値を「基準値」や「基準範囲」といいますが、基準値というのは95％の健常な人がその中に入る値で、逆に言うと、5％の人は健常であってもそこに入りません。検査結果は、食事や運動、採血した時間によっても影響が出ます。基準値や基準範囲は、あくまでも目安の値と考えていただいて良いかもしれません。

また、定期的な検査結果や毎年の健診結果では、「個人の基準値」にも注目する必要があります。過去の検査データを保管し、自分の基準値を把握した上で、その値の変化に注意することが大切です。

検査結果を自己判断するのは危険ですが、医師の診察や精密検査を受けた際などに、現在と過去のデータを提示すれば、より正確な診断をするための材料となります。

臨床検査科（中央採血室）では、患者さんが理解しやすいように主な血液検査項目の意味や特性、基準値について簡潔にまとめた説明用紙「検査結果のご案内」を配布していますので、ぜひご活用ください。



▲検査結果のご案内